
U S O よね . . .

Seabolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

USOよね・・・

【Nコード】

N2818Z

【作者名】

Seabolt

【あらすじ】

突然、お見合いをしるといわれたのぞみ・・・そのお見合いも既に結婚が前提・・・しかも、相手は・・・

「は……」

溜息をしかでなかった。なぜ私が？……しかも……この年で……まだ高校生なのに……そう自問自答する彼女の名は岡田のぞみ（岡田のぞみ）、彼女にとって今回のことは寝耳に水、天国から地獄とはこのことだった。ただベツトの上でただ呆然とし、何度もため息については、ついさっきのことを思い出していた。

「えっ……！お見合い！？……どういうこと？」

家に帰ったのぞみはは思わず大声を上げてしまった。のぞみにとって……この日、天国と地獄がいつぺんにやって来た。それは2学期が始まってすぐのことだった。

まず最初にやってきたのは天国だった。実はこの日のぞみは中学からの同級生の島田雄二しまだゆうじから学校のチャペルの裏に呼びだされた。そこへ行くと、まだ日に焼けて顔は黒く頭はようやくスポーツ刈くらいまで伸びたすつとした顔立ちをした島田雄二が待っていた。

彼は甲子園へは行けなかったが、野球部のエースで四番、しかも頭もいいと学内でも結構人気のあった。

「島田君、どうしたの？こんなところに呼んで。」

そう話しているのぞみ自体、呼び出された時点で、告白されると言う期待で胸が一杯だった。そして、島田はのぞみの予想通りの話をしてきた。

「岡田！！！！おれ・・・ずっとお前のことが好きだった。そして、今も・・・」

目の前で起こっている夢にまで見ていた光景にうつとりとしているのぞみだった。のぞみとしても島田の事が嫌いなわけではなく、答えはむしろYESと即答したいところだったがここはぐっと我慢した、しかし、島田の最後の一言でのぞみは肩透かしを食らった感じになった。それは、のぞみが近づいて手をとろうとした時だった。

「明日、お前の気持ちを教えてくれ！！」

「えっ？」

「明日、ここだな！！」

のぞみが驚いている間に島田は、さっさとこのぞみから離れ去って行った。なんなのよ！！と思いつつも気分は最高の状態だった。

そんな気分で帰宅したのぞみに悲劇は襲い掛かった。それは、家に帰ったのぞみを父が呼び止めたことから始まった。今思えば、大體ごく普通のサラリーマンである父は、こんな時間に家にいること自体珍しいと言うかおかしいことであった。

「のぞみ・・・ちよつといいか？」

珍しいなあゝのぞみはそう思いながら、リビングに入ると両親が目の前に正座して座っていた。しかも真剣な顔をして・・・これってどういうこと？ひよつとして、私に就職しろということ？これでもれっきとした受験生ののぞみ・・・しかも・・・私立だけ進学校である城山高校の・・・それともリストラにあつて学費がきつくなつたの？そう思っているとお父さんが話しかけてきた。

「まあ・・・座りなさい・・・」

言われた通りに両親の前に、しかも正座で座ると・・・二人の雰囲気・・・やはりおかしい・・・こ・・・これは、やはり、リストラされたのお父さん？そう思っていたのぞみの予想だになかった言葉が父の口から飛び出してきた。

「のぞみ、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

「えっ！！！お見合い！？・・・どういうこと？」

私は思わず大声を上げてしまった。

「だから、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

すまなそうな顔で話している父とは対照的に横で母はにこやかな顔をして頷いていた。父の言動に困惑するのぞみ　えっ？い・
・今・・・なんて、と父を見ると顔はマジだ・・・ど・どどどいうこと？そ・・そうよ・・これはきつと冗談よ・・そう・・絶対そうよ・・

「ジョー！！・・・冗談でしょ？お父さんたら〜ねえ〜またまた・・・そうでしょ？」

父の表情が少しやわらぎ、いつものおちゃらけた雰囲気を出してきた・・・やっぱりそうでしょう。おとうさん・・・

「そう・・冗談・・・」

少しふざけたように言おうとした時を母が制した。

「あなた！！」

えっ？お母さんまで・・・どういうことよ。再び父の表情が険しくなった。そして、母の表情も厳しくなってきた。・・・お父さん、お母さんまで、お互いの顔を見合せて頷いちゃって、しかも・・・真顔でのぞみのほうを向いた。

「本当だ・・」

嘘――！！のぞみは一瞬にして思考は完全停止してしまった。何言ってるのよーおとうさん・・・うそでしょー？しかし、本当だという言葉が何度も繰り返し頭の中を駆け巡る・・・どういうこと？のぞみはしばらく呆然とした。

「う・・・そ・・・よ・・・ね」

「うそじゃないわよ。」

母の言葉は容赦なくめぐみに止めを刺した。

「うそでしょ・・・わたし・・・受験生よ」

「のぞみー頼むから・・・」

そう言った父の方を見ると土下座してるのに見て驚いた。・・・ちよつと何してんのよ・・・そう思っていると母まで土下座をしはじめた

「やめてよーおとうさん・・・お母さん・・・」

めぐみの言葉にも土下座をやめない二人、

そもそも原因は、のぞみの父にあった。彼の学生時代　父が通っていた大学の親友である藤堂とうどうとある飲み会の席で将来自分達の子供を結婚させると約束をしてしまったことからだった。あれから数年が経ち、いい加減な父はそのことを完全に忘れていた。しかし、

ある日のこと、仕事上で藤堂と会うことになった。そして、藤堂の開口一番は「あの約束、覚えているだろうな。」だった。父は、最初は、酒の席でと話をかわそうとしたが、藤堂は本気だった。やむなく話を進めることに・・・と私の不幸の元凶を話した父の言葉にのぞみは噛み付いた。

「ちょっと待つて!!この話って・・・すでに結婚が前提なの?」

あわわと再び土下座をする父は、何度も頭を上げ下げしながら

「すまない。のぞみ、本当にすまない。お父さんを許してくれ!!」

「いやよ!!、なぜ!!いきなり結婚なの!??」

「本当にすまない。」

とうとう父は土下座をしたまま、頭を床に当て、私のほうへ顔をあげることにすらしなくなった。ん?と母を見るとにこやかな顔をしてのぞみを見ている。

「いいじゃない・・・のぞみ・・・行き先決まって。」

「ちょっとお母さん!!な・・・なんてこと!!」

「彼氏いるの?」

「な・・・母さん!!!!」

「いないのわよね。そんな男勝りじゃ・・・」

「ちょ．．．ちょっと．．．」

「丁度よかったじゃない．．．」

母の容赦ない言葉はのぞみの心をジャックナイフでズタボロにした。するとその横で土下座し続ける父の侘しい声が響いてきた。

「のぞみ．．．たのむ．．．」

父の方を見ると土下座して髪の毛の薄くなった頭を床に擦り付けている姿が哀れでしうがなくなってきた。おとうさんも乗り気じゃないのに．．．ここまでするなんて．．．のぞみは、ため息交じりに返事をした。

「わかったわ．．．」

そして、ガクツと肩をおとし、うつむき床の継ぎ目を私はじっと見ていた。

そんな．．．酒の席のことを．．．

はあ．．．なんて不幸な少女なの私は．．．そう思っていると父がおもむろに顔をあげた。

「のぞみ．．．これ．．．」

のぞみは父を見るとすまなそうな顔をし差し出した目の前のファイルを見た。そのファイルはかすかに揺れているのがのぞみにもわかった。そして、何度もファイルと父の顔を交互に見た。

「これは？」

その言葉にびくつとする父

しばらく黙っている・・・

「これは？」

もう一度聞くと父は目を閉じふうとため息を付いて頷き、そして覚悟を決めたかのようにこう語った。
しかしその声は徐々に声が小さくなる父親・・・そして、お見合い写真を震える手でのぞみに手渡した。

「見合い相手の写真だ・・・相手の名前は、とつとつひかる藤堂光・・・」

藤堂光その名前はのぞみにとって、聞き覚えのある名前だった。そう彼は彼女が通う高校では知らないものはいない有名人だった。・・・しかし、その写真を見て愕然とした・・・おかつは頭のデブ・・・センスのないまるく赤いふちをしたメガネをして・・・それになに、この意味のない無精ひげ・・・一瞬期待していたのぞみにとつては、悪夢そのものだった。のぞみが呆れて目をそらし父の方を向くとうつむいて目をあわそうとせず小さな声でぼそと

「28さい」

のぞみは目を見張って、もう一度の写真を見た。2・・・28歳って私より10歳も年上ってどう見てもこの人28に見えない・・・しばらく、その写真をじつと見ていたというか固まっていたのぞみ・・・やがて・・・手が震えだした。

「のぞみ？」

かすかに聞こえる母の声、どうしよう振るえが止まらない・・・

「うそ・・・よ・・・ね？」

私はお見合い写真がぽとりと落とした。父は、その音に気付き顔を上げた。それに気付き私が父の方を見るとさっと頭を下げ土下座の状態に戻った。

「すまん・・・」

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

かなりの沈黙の後、

「あゝ!!!!!!!!!!」

のぞみの心からの叫び声に驚き両親は、思わず抱き合っていた。

どうしよう・・・

本当に娘の幸せを考えてるの？

はあゝ・・・・・・・・とため息をついて席を立った。

「どこに行くの」

母の一言に思わず両親を睨むと両親は抱き合ったままびくつとなっていた。

「寝る」

部屋に戻ったのぞみは、お見合い写真をゴミ箱のほうへ投げた。しかし、その軌道は大きく外れ、壁に直撃、偶然に壁にもたれ掛け写真がのぞみのほうに向けパカリと開いた。その写真を見て思わずそれを閉じた。のぞみはベットに倒れこんだ。なにが藤堂光よ！！そう思っているとふと同じ高校に通う藤堂の顔が浮かんた。

藤堂光、藤堂グループの御曹司、学校中の女子が憧れるバリバリのイケメン男子で御曹司とあって毎朝高級車でご登校。そんな彼にのぞみも憧れていた一人だった・・・・でも、身分が違い過ぎる。そして、彼には、立派なご令嬢の彼女、音羽えり（おとわえり）がいる。しかもその彼女とは幼馴染ときている。どこにも入る隙もないし、うわさでは、ちょっかいを出したら、音羽さんに相当いじめられるって聞いていた。だからのぞみにとっては雲の上の存在の彼女だった。いくら同じ名前でも・・・・と思い再びのお見合いの写真を見たそして、思わずその写真をゴミ箱へ投げ捨てた。

ベットの上で膝を抱えるのぞみ。横を見ると鏡に映る自分の姿が

目に入ってきた。ショートカットのヘアにごく平凡な顔立ち空手を
しているせいか、どちらかと言えば男の子っぽいなんて不幸なん
だろう……。やっぱりあのおかっぱデブとは、違いすぎる……。
いかなんとかしないと……。うーん……。何か忘れているような。
……。そうだ……。今日告白されたんだってっけ……。今度は
島田雄二の顔が浮かんだ……。明日返事しないと……。ん？……。こ
の見合い壊すの手伝ってくれるかな？。あーどうしよう……。眠れ
ない……。

こうして、のぞみの眠れない夜をすごした。

藤堂は、さっき父親から渡されたもう一度お見合いの写真をみた・
・そして、思わずゴミ箱に投げ捨てベツトに倒れこんだ。親父の奴
全く一体何を考えてるんだ?・・これが藤堂が最初に思ったこと
だった・・

実は同じことが藤堂家でも起こっていた。

それはちよつと前のことだった。呼び出されリビングに出てきた藤
堂は父の言葉に我が耳を疑った。

「来週の日曜日に婚約者と会うことになった。」

「ちよつと待て!!婚約者って!!どういうこだ!!」

ダーン!!!と机を思いつきり叩くと同時に藤堂は叫んだ。

「親友との約束でな、まあ・・いきなり結婚という訳にいかんから、
とりあえずお見合い形式で顔をあわせることにな」

「約束って、俺何も聞いてないぞ!!」

「やかましい!!」

父親はそう怒鳴り、机を叩いた。そして、フンと鼻息を荒くして、

「光!!もう決まったことだ!!それとも、わしの顔を潰す気か!
!」

立ち尽くしぐつと拳に力が入る藤堂、親父の奴！！だいたいこうなると親父は誰の言うことも聞かなくなるということを息子である藤堂自身が一番知っていた。

「けど・・・」

藤堂の言葉を見無視する親父は腕組みをして藤堂を睨んだ

「学校でも良い噂きかんのだが」

「なんのことだ。」

「この前の件だ・・・」

「あれは・・・」

それは、夏休みの前のある日のこと、藤堂に自転車であつつかつてきた奴がいた。そいつの両親は、藤堂の父の知り合いだった。両親は学校を辞めさせないでくれと父にまでお願いしに来ていた。しかし、藤堂のせいでその彼は10日もしないうちに学校を去ることになった。実のところ藤堂はその彼を許し、取り巻き達には手を出さず今まで言っていたのだった。しかし、藤堂に逆らったら学校を辞めさせられる・・・そういう噂が先行していった。そして結局その彼は何もおきないまま噂に負けて学校を去った。あのことをうらんでいるのか親父は？そう思う藤堂に父親は追い討ちを掛けた。

「そろそろ落ち着いたらどうだ。」

「それとこれとは全く話が違っただろうが！！」

そんな姿を見ていた親父は、”ほれ”と言わんばかりにお見合い写真を藤堂の前に出した。

「？」

目の前に置かれた見合い写真を見て、いやな予感がした藤堂……手にした見合い写真を開こうとした時、父がこういった。

「相手だ。岡田のぞみさん28歳」

その言葉にちよつと待て今なんていった？確か28歳って言ったよな？そう思つて父親を睨んだ。

「何睨んでんだ！！お前は年上が好きだったろ？」

ぐつと堪える藤堂、幼いときに母を早くなくした彼の初恋の人は身の回りの世話をしてくれた家政婦だった。しかし、そんなことは藤堂にとつて既に過去のことだった。何をいまさら 写真を開いて見た。その瞬間、目はこれでもかと言わんばかりに開き顔は硬直した。そして、わが目を疑った。

「……………（声が出ない）」

な……なんだ？この写真？親父本気か？どう見ても40過ぎのおばちゃんじゃねえか？しかも、下手なというか？なんていう化粧の仕方だ？そう思つたらただ震えて……父親を睨んだ。

「なんだその目は……」

そこには、どう見ても少し太めのおばさんの姿が映っていた。

「・・・・・・・・」

「何か文句でもあるのか？」

「・・・・・・・・」

藤堂は無言で、部屋を後にした。

「今度の日曜日は絶対にあわせるからな！！！」

ベットに横になっている藤堂は、岡田のぞみ・・・か・・・そう思いながら・・・悩んでいた。ふと、幼馴染の音羽エリの顔がよぎった。学校では彼女として周りに公認されているが実のところがどうも合わない。藤堂自身は思っていた。あの性格からしてエリには頼めない・・・というか親父の奴すでに手を回してるかもしれない・・・ふと、音羽の姉、音羽静の顔が浮かんだ。しず姉えには迷惑はかけられない・・・どうしたらいいんだ？

こうして藤堂も眠れぬ夜をすごした。

さいあく・・・1

この日、のぞみは最悪の目覚めを迎えた。それは、ほとんど眠ることが出来ず、うつらうつらと眠りそうになった瞬間にけたたましく鳴り響く目覚ましに叩き起こされたことによる究極の睡魔と体のだるさ。それは2度寝をして起きた後に訪れるとてつもない眠りと体のだるさの非ではないくらいつらいものとなった。何とか起き上がったのぞみだったが未だに解決の糸口は見えず頭の中は混乱したままだった。ただ今日、島田に会うこと、それがのぞみの唯一の希望の光であった。しかし、彼女の悲劇はこれだけでなかった。この後、電車に乗り遅れ、しかも次の電車は満員電車。とにかくついていなかった。

ようやく校門までたどり着いたのぞみは睡魔に襲われ朦朧とする意識の中、道路の真ん中を歩いていた。その頃一台の高級車が校門を通過して彼女の後ろに迫っていた。そして、その車はのぞみの後ろまで迫りクラクションを鳴らし始めた。しかし、のぼみはそのことに気付かず漫然とあるいていた。普通なら誰かがのぞみに声をかけるのだがその車を見て誰も動けなかった。そうその車の主は藤堂だった。

一方、車でうつらうつら藤堂はそのクラクションで目を覚ました。

「どうした？」

運転手がクラクションを鳴らすが目の前にはふらふらと歩くのぞみの姿がそこにあった。しかも、何度クラクションを鳴らしても、全く反応がない。いい加減に運転手も苛立ちクラクションの回数が増えてきた。

「なんなんだ、あの子は？ワザとか？」

目の前をふらふら歩く少女を見た藤堂 なんなんだこいつ？
どういうつもりだ？ そう思いつつも目の前の様子を見ると、
クラクシヨンに一向に気付く気配もなくただ歩いている。これでは
埒が明かないそう思った藤堂は運転手の肩を叩いた。

「いい、ここで降りる。」

「えっ？でも」

「いいから止めろ」

車から降りた藤堂はのぞみに向かって歩いて行き腕をとった。

「おい」

腕を取られたのぞみはえっ？一体何なの？ただでさえ回らない頭に
突如体をゆすられ、ある種のパニック状態になっていた。もう・・・
なんなのよ！！そう思っているところへ再び藤堂が声をかけた。

「おい！！」

「なんなのよ！！一体！！」

のぞみが振り返り顔を上げるとそこには藤堂の顔があった。しまつ
た？何故？藤堂さんがここにいるの？のぞみはそのまま固まってし
まった。一方、藤堂は振り向いたのぞみが目の前に飛び込んできて、
しかもその真っ赤でかすかに涙を浮かべている目が自分をしたから見
つめる姿に言葉を失った。

「あっ・・・」

しばらく見つめう二人・・・その様子を見ていたギャラリーからヒソヒソと声がしてきた。

その声に気付いた藤堂は車の方を指差した。

「よく見る。」

のぞみが指差されて方を見るとそこには一台の車があった。運転席からはハンドルを抱えてのぞみを睨んでいる運転手の姿が確認できた。やばーやつちゃった　震える指で車をさしたのぞみは、視線を藤堂の方に向けた

「ひょっとして・・・」

「そう・・・」

少し険しい顔をした藤堂がコクリとうなずいた。

「私が邪魔を・・・」

「そう・・・校門から・・・」

藤堂は、道端までのぞみの手を引いて歩いた。

「ごめんなさい。本当にワザとじゃないんです。」

まずい・・・怒鳴りつけられる・・・どうしよう

そう思いのぞ

みはひたすら藤堂に頭を下げ謝った。それはこの間の事件の時は、藤堂もマジになって怒鳴り散らしていたからだった。しかし、このときは何かが違った。車が通れるとこを間でのぞみをつれてきた藤堂は掴んでいた手を離した。

「もういいから行け！」

「ごめんなさい。」

何回も頭を下げ謝るのぞみ

「わかったから、行け。」

「ありがとうございます。」

助かった・・・そう思いのぞみはそそくさと逃げて行った。

のぞみの後姿を見送る藤堂は、しばらくして、さっきまで握っていた手をみた。なぜ？俺は怒らなかつたんだ？そして、人波の中に消えていくのぞみの姿を目で追った。そんな時だった。ふと小さい頃を思い出した。ひかるちゃん偉いね！そう言つて藤

堂の額にキスをする少女も姿・・・あの時は、その少女の妹を怒るのを我慢したときだった。気が付くと自分の額に手を当てていた。

いかん・・・俺は何を・・・やはり昨日のことで眠れなかつたせいかな・・・藤堂は頭を振った。そして、運転手に

「ここから歩くから・・・」

そうついい残し、教室に向かった。

さいあく・・・2

あゝ！！さいあくゝ！！朝からなんてついてないの　のぞみ
は頭を抱え自分の席にいた。やってしまった・・・手を引かれ
一瞬で目の前に現れた藤堂の顔が浮かんできた。こういう時に限つ
てのぞみの頭には悪いことしか思いつかなかった。ひょっとして・
学校を追い出されるかも・・・ということはすぐ結婚？いやだゝ！
！・・・その瞬間、さっきまで浮かんでいた藤堂の顔が思い出したく
もない顔に変化した、そうおかつば頭をした意味のない無精ひげを
生やしたデブのおっさんの顔が・・・思わず頭を左右に振り、そ
して、そのまま机に伏せた。そんな時のぞみの後ろからそっと近づ
く二人の姿があった。親友の岩崎裕子と大山美由紀だった。

「のぞみゝ見たわよゝ」

「うるさい・・・」

のぞみは、ふと顔を上げ・・・はあゝとため息をつきつつむいた。
その肩に手を掛けた岩崎

「どうしたの？元氣ないね。」

「いや。別に・・・」

目の前に立つ二人を見たのぞみ・・・再びため息を付いた。それを見
ていた大山はそつと後ろに回った。

「本当？」

そう言つて、のぞみの首を絞めた。

「ぐあゝ!!」

いきなり首を絞められたのぞみはのけぞつた、その状態で大山は質問をした。

「よく、あんなことできたわね」

「は・・・はなして・・・」

のぞみは、大山の手を軽く叩いた。そして、ようやく首を開放した大山の前で首を押さえしばらく咳き込んだ。ふうとため息を付いて二人を見た。

「あんなことつて？」

のぞみの言葉に目が点になる二人・・・

「ちよつと!!大丈夫、のぞみ!!」

今度は岩崎がのぞみの両肩を持つて前後に激しくゆすつた。その揺れにあわせ首が前後するのぞみは両手で岩崎の肩を持ってゆするのを止めた。

「裕子、だからなんなのよ!!」

「だから、今朝のことよ・・・」

「今朝つて？」

「藤堂さんの件よ、」

「あ・・・あれね・・・」

「あれねって、のぞみが追い出されるって、もう学校中大騒ぎよ！
！」

のぞみは、二人を交互に見て、溜息をついた。このまま追い出されたら・・・ふとさっきの不気味な顔がのぞみの頭をよぎった。あゝ！！と叫びながら、頭を数度横に振っているを見て、心配する二人

「のぞみ・・・大丈夫」

「とにかく、藤堂さんに謝りに行きましょう！！！！ね」

そう言っただ山がのぞみを手を引いた時、

「ほつといてよ、それどころじゃないのよ。あゝ！！もう終わりよ！！！」

そう言っただのぞみはその手を振りほどき、頭を抱え込んで再び机に伏せた。この不可解な行動に、おろおろする二人だったが、ある人物が目に入って思わすのぞみから離れた。

机に伏せていたのぞみは、フト暗くなったのに気付いた。どうしたんだろう、ひよつとして眠ってしまったの？そう思って見上げるとそこには、音羽えりとその仲間が立っていた。頭が混乱しているのぞみには、何故彼女がここに来たかが理解できずに・・・音羽とその愉快な仲間達だ・・・ただそう思っていた。ふと見ると岩崎と

大山の姿がなかった。どこ行っただのとあたりをキョロキョロしていると教室の片隅に二人が逃げていたを見つけた。あの二人……そう思っていたら、目の前で腕を組んで立っている音羽がのぞみを睨み声をかけてきた。

「ちよつと!!あなた」

そう言われたのぞみは、辺りを見回して音羽の方を向いた。そして、のぞみは自分を指差し聞き返した。

「ひよつとして?」

「あなた以外に誰がいるの?」

えっ?何で私なの?そう驚いてるのぞみに音羽は話を続けた。

「あなたに警告しに来たの」

「警告つて?」

どういうこと?のぞみは不思議そうに首をかしげた。その行動を見て音羽は眉間にしわを寄せのぞみを睨んだ。

「そう……あなた……自覚なさそうね」

「なにを?」

「本当に……しらばっくれて!」

「えっ?」

「藤堂さんの車が通るのを邪魔したでしょう!!!」

音羽の声のトーンが徐々に上がってきた。のぞみは音羽の声に押され座ったまま少しのけぞった。その時、のぞみを再び睡魔が襲ってきた。そして、音羽の前で大あくびをした

「ただ、眠たかっただけなの。うあああ」

その顔を見てあきれた音羽は、一度横を向いて息をふつと吐いた・

・

「まあ、今日は見逃したげるわ・ふん」

そう言い残して音羽たちは教室を去って行った。

しばらくして、近寄ってきた岩崎と大山・

「なに・・・あれ・・・」

「なに・・・って、あんた達、」

のぞみ急にキョロリ、キョロリと二人を見て

「えっ・・・どうしたの？急に元気出して・・・」

「あなたたち・・・私を見捨てて逃げたでしょう？お仕置きよ」

さいあく・・・3

頬杖を突いて席に座っている藤堂は、さっき手を引つ張った時、振り返ってきた彼女の顔が思い浮かんだ。そんな時、俺どうしたんだ？何故あいつの顔が気になるんだ？そう思っていると横から聞きなれた声が耳に飛び込んできた。

「よう。藤堂」

そう言つてポンと肩を叩いた小宮真、そして、井上豊は笑いながら鼻しけてきた。

「どうしたんだ。藤堂。今朝のあれ。」

藤堂は頬杖を着いたまま二人から目をそらしたため息混じりに声を漏らした。

「あゝあれか・・・」

元気ののない藤道に二人は顔を見合わせた。そして、井上が藤堂に肩を組んで

「いつもならもつと怒つてたろう。」

「そうか？」

力なく答える藤堂・・・

「そういえば・・・元気ないな・・・どうした？」

小宮が藤堂の顔を見て、聞いてきた。

「いや・・・なんでもない。」

味気ない返事に井上と小宮は顔を見合わせ、首をかしげた。そこへ音羽が教室に入ってきた。

「ひかる
光」

「おっ・・・彼女のお出ました・・・」

藤堂は、ちらりと音羽に目をやり、ふうくとため息を付いた。

「どうしたの。？」

音羽は、不思議そうに見て、藤堂の前に座る。

「なんでもない・・・」

そついうと藤堂は音羽から目をそらした。

小宮と井上の方を見た音羽は、藤堂を指差し

「？」

二人は、両手を挙げ、わからないそぶりを見せた。

「まっ・・・いつか・・・今朝の見たわよ」

「何を？」

「あれか？」

まともに返事をしない藤堂に

「どうしたの。本当に」

「なんでもない・・・」

「そう？・・・ところで、今週の日曜日あいてる？」

音羽が聞くと藤堂は、さらにため息をついて

「その日は、用事がある。」

「あっそう・・・じゃあ今度ね・・・」

そう言って音羽は立ち上がり小宮と井上に

「どうしたの」

「朝からあのまま・・・俺達にもわからん。」

「そう」

音羽は教室を後にした。

昼休み、藤堂は、礼拝堂の裏にあるベンチに腰掛けていた。この場所は藤堂のお気に入りの場所です。一人でいることが多かった。藤堂は悩んでいた。親父の奴。一体何を考えてるんだ？なぜ、今なんだ？そこへのぞみが一人で歩いて来るのが目に入った。あの女、今朝の・・・と気付いた藤堂はその様子を見ていた。

のぞみは昼休みに入つてすぐに、昨日島田と会つた場所へ向かつた。昼休みよね。確か　そう思いしばらく携帯の時計を見ながら待つていた。　遅い・・・ひよつとして昨日のはうそなの？それとも今朝のことです・・・あつ来た　と目の前に島田の姿を確認した。

「岡田さん・・・」

島田が声をかけて近づいてくる様子を見て少しもじもじするのぞみ　来てくれたってことは、　のぞみの前に来た島田を見て少しうつむいた。

「あの・・・」

のぞみが決心して、話そうとした時だった。島田の様子がおかしいのに気付いた。それは目を大きく見開いて、のぞみの後ろを見ていた。

あれ、どうしたんだろう？

「岡田さん・・・」

「はい・・・」

そう答えたのぞみの肩に誰かの腕がずしつと乗った。その衝撃に驚いて振り向くとそこには藤堂が立っていた。

「と・・・藤堂さん？」

その声にチラツとのぞみを見た藤堂は視線をすぐに島田の方へ向けた。何故藤堂さんがここにいるの？のぞみがそう思っていると藤堂が島田に話しかけた。

「島田・・・この娘と話があるんだけど、はずしてくれないか？」

「え？けど・・・」

しばらく固まる島田・・・島田君逃げないでと祈るのぞみを無視して、島田に睨む藤堂

「昼休み終わるんだけど・・・」

「岡田・・・悪いわ。」

そそくさと逃げようとする島田

「あつ・・・ちょっと」

のぞみが止めようとするが島田は逃げて行った。

「じゃあ・・・」

「島田君・・・」

のぞみが言った言葉にはむなしさしか帰ってこなかった。あ・・・のぞみの心の叫びは届かぬまま、島田の姿は校舎の影に消えていった。どうしよう・・・そう思って振り向くとそこには、少しにやけた表情の藤堂が立っていた。

「何てことするの？」

のぞみは思わず言ってしまった。その言葉を聞いてしばらくのぞみの顔を見た藤堂、こいつだったら・・・いけるかもそう思い。のぞみの顔を指差した。

「今朝の事といい・・・いい度胸してるなあ」

「えっ・・・」

「名前は？」

「えっ？」

「だから・・・名前は？」

「岡田のぞみ・・・」

仕方なしに答えるのぞみ・・・岡田のぞみと聞いて、藤堂は、お見合い写真を思い出した。そして、のぞみをもう一度よく見ようと近づいた。

近づいてくる藤堂・・・な・・・何故？近づいてくるの？そう思いつつ少しづつ後ろにさがるのぞみ・・・

「な・・・なんなのよ!!」

「ふん・・・岡田のぞみ・・・か」

さらに近づいてくる藤堂・・・やがて、のぞみの背中が壁にドンと当たった。えっ？さ・・・下がれない・・・どうしよう・・・のぞみがそう思っているのと藤堂の右手が伸びてきた。思わず目をつぶるのぞみ・・・その手は、のぞみの顔をかすめバンと壁についた、

そして

「気に入った・・・」

「えっ？」

その言葉に驚き目を開けると藤堂の顔が目の前にあった。なんなのよー!!今朝の仕返し？そう思っているのぞみに藤堂はやさしく語りかけた。

「しばらく、俺の彼女にならないか」

さいあく・・・4

い・・・今・・・なんて言ったの　確か彼女って言ったわよね・・・のぞみの思考は3秒ほど止まった。ふと藤堂を見るとち・・・ちかい・・・それもそのはず、彼の顔が目の間じかにあったからだ。そして、藤堂からの驚きの一言に思わず聞き返した。

「いま・・・なんて？」

小首をかしげているのぞみに対し藤堂は、冷静に答えた。

「だから、彼女にならないか？」

「誰の？」

「俺の」

「私が？」

そう聞き返すと藤堂は軽く頷いた。のぞみは混乱した、何言ってるのこの人、音羽さんて彼女がいるくせに・・・一体何考えてるのよ・・・と言っより、私の・・・と島田とのことを邪魔をされたことを思い出した。そして、ふうくと息を吸って

「何言ってるのよ。」

藤堂はにやりと不適な笑みを浮かべた

「彼氏もないだろう。」

あゝ頭にくる・・・のぞみは、藤堂を睨み返した。

「あんたには、関係ないでしょ!」

藤堂はフンフンと頷きながら、のぞみの顔を指差した。

「まあ・・・関係ないけど・・・でも、こんなにいい条件はないぞ。」

いい条件って・・・確かに条件はいいけど・・・音羽さんはどうするのよ・・・のぞみは、その指を持ってそれを振りほどいた

「それに、立派な彼女がいるじゃない。」

「あゝあいつか・・・あいつじゃだめなんだ・・・」

「なぜ?」

はあ・・・今なんて?・・・藤堂さん・・・あなた・・・彼女がいるのにただでさえ・・・ややこしいのに・・・しかもあの音羽さんなのに・・・彼女が今の状況知ったらどうなるのよ・・・本当に・・・

藤堂としては、いい加減に折れろよ・・・ほんと・・・!!に面倒な奴だな・・・エリじゃダメなんだよ・・・今回のことは・・・だんだんと苛々してきた。

「あいつじゃあ、駄目なんだ。」

「だから。なぜ？」

「俺がいやなんだ！！！！」

藤堂の言葉にしばらく、固まる二人、なんなのこいつ？自分の彼女が嫌なんて？のぞみは呆れた。少し大きく息を吸った。

「嫌よ！！」

「嫌とはなんだ嫌とは！」

こいつ一体・・・俺のどこが嫌なんだ？だんだんと声のトーンが上がる藤堂

「嫌なものは、いやよ。」

「そうか・・・どうしても嫌か」

「ええ・・・」

のぞみがそう言った次の瞬間、藤堂の左手がのぞみの顎をそつと持ち上げ、のぞみの唇に藤堂の唇が重なった。

「！！！！！！」

のぞみは目を見開いて硬直した。

目の前には藤堂の顔が・・・

そして、唇には感触が……

と……藤堂さんと……

キ……キスしてるの？わたし？

頭の中は、真っ白だった……

やがて唇がそつと離れ、藤堂がのぞみをじつと見つめる

のぞみは硬直し、ただ藤堂の目を見ていた。

キ……キスされた……藤堂さんが見ている……

顔が熱い……どうしよう……

そう思っていると藤堂が話しかけてきた。

「これで……いいか？」

その言葉でわれに返ったのぞみは、唇を両手で覆った。

「これで……付き合ってくれるか？」

話が言い終わる前にのぞみの右手が藤堂に炸裂した。

パチーン!!!

「えっ？」

藤堂は、叩かれた頬を押さええのぞみを見るとその目には涙が・・・

「嫌よ!!!」

そう言っつて、のぞみは、走り去っていった。

「おい・・・待て・・・」

なんなのよ・・・

もう最低・・・

のぞみはその場を去って行った。

長い夜・・・

のぞみの背中を見送る藤堂、彼女の姿がが後者の角に隠れるまで見送っていた。そして、見えなくなると叩かれた頬がジーンとしてきた。その叩かれた頬に手を当て、呆然と立つ藤堂　ふと幼い頃に注意され叩かれた時の記憶が甦ってきた。その時も理由は覚えてないが彼女の妹を泣かせた時だった。藤堂を叩いた彼女も涙に目を浮かべ

「女の子を泣かせちゃダメでしょ!!」

そう叫んでいた。そのことを思い出した藤堂・・・しばらくして、とぼとぼと歩き溜息をついた。俺は一体何をやっているんだ？ただなんとなく胸が痛い・・・そのまま学校を後にした。

教室に戻って来て、すぐさま、鞆をもって教室を出ようとするのぞみに驚いた大山と岩崎

「どうしたの？のぞみ」

「帰る。」

「どうしたのよ。のぞみ!!」

「帰るの!!」

そう言って教室を出ようとするのぞみを大山が肩を引っ張った。

「あ・・・」

振り返ったのぞみの顔を見て言葉を失った、大山と岩崎・・・のぞみの目には涙が・・・

「じゃ・・・」

ただ呆然とのぞみを見送った二人だった。

放課後、のぞみのクラスは騒然となった。それは、また、音羽がやってきたからだだった。藤堂が帰ってことを知った音羽に間が悪いことに井上がボソツと適当に言ったことが原因だった。

「藤堂さんどうしたの？」

「帰った」

「なぜ？」

「今朝のことです・・・なんかあったみたい。」

その言葉を聞いた音羽、あの娘、警告を無視して・・・キツと目が鋭くなった。そして、いつもの仲間を連れて、のぞみの部屋に向かった。

「あの娘どこ？」

突如、現れた音羽に教室はざわついた。そして、クラスの一団が音羽の行動に引いた。

「あの娘は？」

そう言つて、逃げ惑うのぞみのクラスメートの一人を捕まえた。

「あの娘、どこ行つたの？」

「え．．ええ．．．．．昼休みが終つたら帰りました。」

「えっ？」

音羽は拍子抜けした。なに？！帰つたつて？どういふこと？

「本当に？」

「はい．．」

「ま．．いいわ．．．」

そつといい残し音羽は歸つて行つた。

それから、しばらくしてのことだった。島田がひよこつりと現れたのは、そして、大山から歸つたことを聞いて、肩を落とし歸つて行つた。

家に帰ったのぞみ、一人ベットの上で膝を抱いて泣いていた・・・もう・・・最悪・・・なんでこんなことに？島田君を巻き込もうとしたから？今朝のことを思い出した・・・このままじゃ・・・学校も追い出され、無理矢理あいつと結婚するの？ふとあのお見合い写真が頭に浮かんだ・・・あゝあゝ嫌だ！！一人抱えた膝の上に顔をこすり付けていた。どうしよう・・・嫌だ・・・こんなの嫌だ・・・そう思った瞬間、学校での藤堂光のことを思い出した。

「俺の彼女にならないか？」

その言葉を思い出した瞬間、藤堂のドアップ・・・そして、キスを思い出した・・・思わず唇を触ったのぞみ・・・キ・・・キス・・・したんだ私・・・あの藤堂さんと・・・しかも・・・ファーストキス・・・唇にはあのとときの感触が甦ってきた・・・一瞬で顔が暑くなり、心臓の鼓動が激しく高鳴った。そんな時だった携帯が鳴り出したのは・・・はっと我に帰ったのぞみは、携帯をとり表示を見ると大山からだった。

「もしもし」

「のぞみー！！大丈夫？」

「うん。」

「どうしたのよ。」

「なんでもないってば」

「そう？本当に大丈夫？」

「うん。」

そう言っているのぞみだったが、目から涙が出ていた。

「ほら・・・泣いてるでしょう・・・」

「大丈夫だってば・・・」

「そう・・・じゃあ・・・のぞみが帰った後の話なんだけど・・・」

「うん。」

「音羽さんがきたの・・・」

「うん」

「でも、のぞみないからすぐ帰ったんだけどね・・・」

「うん・・・」

「それと・・・」

「・・・」

「聞いてる？」

「うん・・・聞いてるよ・・・」

「島田君、来たのよ。のぞみを探しに・・・」

「えっ？」

「だから・・・島田君が来たの・・・ひょっとして、のぞみ、付き合ってるの？」

「付き合っていないわよ・・・」

「あ・・・そう・・・じゃあ・・・早く元気になつてよ」

「うん・・・ありがとう・・・」

「じゃあ・・・」

切れた携帯を見たのぞみ・・・そうだ・・・島田君を巻き込んだらいけないんだ。明日、言わないと付き合えないって・・・そこには、一人膝を抱えたのぞみの姿があった。

藤堂も一人自分の部屋でじっとしていた。そして、思わずキスをしてしまったことを思い出した。何故あんなことを・・・そう思っている、携帯がなった。音羽からだった。しばらく放置していたのだが鳴り止まない・・・仕方なくとることにした。

「もしもし・・・」

「あ・・・光？聞いてよ・・・」

音羽の甲高い声が藤堂の頭に響いてきた。

「ごめん・・・切る・・・」

そう言おうとした瞬間、音羽の話に切ることが出来なくなった。

「あの娘のことなんだけど・・・聞いてる？」

あの娘その言葉・・・岡田のことだ・・・そう思うと思わずぐつと手に力が入っていた。

「ああ・・・」

「あの娘も学校辞めるの時間の問題よ。」

「えっ？」

「だって、昼休み終ったら帰ったんだって」

「そうか・・・じゃあ・・・」

「もう一つあるんだけど・・・」

「まだあるのか？」

「実は・・・」

「えっ？」

その言葉に藤堂は我が耳を疑った……

「実は……お姉ちゃんの婚約が決まったの……」

「あ……そう……」

「ちょっと聞いてる？」

思わず携帯を下ろし、音にならないため息をついた。しず姉^{しずねえ}が婚約？……しず姉……藤堂の幼馴染でしかも片思いの相手だった。しかし、彼女は妹のエリ思いでもあり、彼女自身にとって、藤堂は弟みたいな存在だった。それをわかつていた藤堂……そして、藤堂が中学くらいになった時、彼女は従兄の隆と付き合い始めていた。だから、藤堂は気持ちを伝えることすら出来なかった。現実を突きつけられた藤堂……婚約……か……その時、再びのぞみの顔が浮かんだ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2818z/>

USOよね・・・

2011年12月17日21時53分発行